



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	社会学的視点から見る「嗜癖」の予備的考察 ; ギデンズの後期近代論の検討
Author(s)	保田, 真希
Citation	教育福祉研究, 17, 89-99
Issue Date	2011-11-01
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/47427
Type	departmental bulletin paper
File Information	YASUDA.pdf



社会学的視点から見る「嗜癖」の予備的考察 —ギデンズの後期近代論の検討—

保 田 真 希

1. はじめに

まず、本稿は嗜癖を考える前段階として、ギデンズの論じた嗜癖と後期近代に関する議論の有効性と限界を整理し、嗜癖の予備的知識として考察することを目的としている。

なぜ、本稿はギデンズの嗜癖論と後期近代論を取り上げるのか。それは、「嗜癖」という現象の捉え方と関わっているため、ここで簡単に「嗜癖」について整理しておく。

嗜癖とは『「アディクション」』『依存症』とも呼ばれ、これらはほぼ同義であり、依存症は状態、嗜癖は行動に焦点があるとする見方（信田2000：34）として捉えられ、はじめはプラスの効果を得られていた行動が習慣化し、時間の経過とともにマイナス作用が生じるようになって、その制御が困難になるという「コントロール喪失」とそれに伴う生活破綻の病理を指している（信田2000）。また、日本の嗜癖に関する研究の第一人者である斎藤は「自己のコントロールにあったはずの習慣行動から派生して、自己のコントロールをはずれる状態に至ったもの」（斎藤1988：91）と説明している。さらに、斎藤（1988：73-129）によれば、嗜癖とは信念体系や価値観が覆されそうになる局面（パラドキシカルな状況）において治療策として自発的に生じ、苦悩する自己が知の獲得の新しい局面に入るための様々な工夫の1つ（自己防衛などの手段）であるという。

このように、嗜癖の発症要因や回復過程において「自己・自己コントロール」に着目して言及しているものが多くなってきている。しかし、日本において、嗜癖は心理学や精神医学といった臨床

学的な視点から論じられる傾向が強いように感じる。一方、世界的に見ると、臨床学的アディクション論と社会的アディクション論を繋ぐ形で論じたシェフ¹⁾や、性的役割分業といった社会的な構造を含めてジェンダーの視点から嗜癖の捉え直しを行ったペプコ²⁾など、臨床学的な視点のみならず、社会的なコンテクストを含みながら嗜癖を扱っている。こうした社会学的な文脈から嗜癖を扱う背景には少なからず、後期近代における「自己」（個人）と嗜癖とを関連付けて論じたギデンズの議論がベースにあるように感じる。つまり、嗜癖は個人の問題であると同時に、個人が生きている社会とも関連した問題であるため、臨床学的な視点のみならず、嗜癖を研究する上で社会的なコンテクストに置くことが必要なのではないだろうか。

以上のことから、本稿では私たちが今生きている社会（後期近代）はどういう特徴を持っているのか、また社会と嗜癖がどのように関連しているのかについて、嗜癖を社会学的な文脈に置きながら論じている研究者のうち中核となっているギデンズの議論を整理し、有効性と限界をまとめていくこととする。また、本稿は、1.「はじめに」、2.「後期近代とは—自己に着目して—」、3.「ギデンズが論じた社会的アディクション（嗜癖）論」、4.「ギデンズの議論の有効性と限界」という構成で整理していく。

2. 後期近代³⁾とは—「自己」に着目して—

ここでは、ギデンズが論じた後期近代論を以下の2冊を参考にしながら、整理していく。

・Giddens, A. (1991) *Modernity and self-*

identity, Stanford, Polity press. (=秋吉美都・安藤太郎・筒井淳也 (2005)『モダニティと自己アイデンティティ—後期近代における自己と社会』ハーベスト社。)

- ・Giddens, A. (1991) *The Consequence of Modernity*, Polity press. (=松尾精文・小幡正敏訳 (1993)『近代とはいかなる時代か？—モダニティの帰結—』而立書房。)

ここで、整理を行う前に訳者の一人である小幡の解説 (小幡 1993: 243-244) を参考にしながら、簡単にギデンズの人物紹介を行う。ギデンズはイギリスの社会学者であり、おおまかに3つのテーマを中心に著作活動を行ってきた。第1は「マルクス、デュルケム、ウェバーを中心とした近代社会理論の古典の読み直し」(小幡 1993: 243)、第2に、そうした読み直しを土台に、人間と社会にかかわる現代のさまざまな理論を哲学から地理学に至るまで批判的に精査し、独自の社会理論である「構造化理論」をつくらうとするもので、第3が近代社会の歴史的生成の解明というテーマである。これらのテーマを貫くものとして常に意識していたことが「近代をいかにとらえるか」という問いであり、ギデンズはこの問いを「モダニティ」の問題と関連付けて論じている。

(1) 近代社会の特徴—脱埋め込み・再帰性・時間と空間の分離

1) モダニティ (近代的なるもの)

近代社会とはどういう特徴を持っているのだろうか。ギデンズはモダニティ (近代的なるもの) を「およそ17世紀以降のヨーロッパに出現して、その後ほぼ世界中に影響が及んでいった社会生活や社会組織の様式」(Giddens 1991=訳書 1993: 13) であると定義し、近代的制度の絶えず変化を求めていく側面や世界を包み込むような側面の両方と関連しているという。近代社会の形態には、「国民国家という政治システムや、無生物エネルギー源への生産の全面的依存、生産物へと賃金労働の徹底した商品化」(Giddens 1991=訳書 1993:

30) が見られる。モダニティの示すダイナミズムは「時間と空間の分離」、社会生活を時間空間面で正確に带状区分する形での再結合、社会システムの「脱埋め込み」、「知識の絶え間ない投入が個人や集団行為に影響を及ぼす」という意味での社会関係の『再帰的秩序化と再秩序化』(Giddens 1991=訳書 1993: 30) によってもたらされる。特に、「ハイモダニティ (後期近代) の世界を生きるということはチャンスとリスクの環境に生きるということ」(Giddens 1991=訳書 2005: 123、傍点は筆者) である。

2) 脱埋め込み

ギデンズは近代世界への移行を「脱埋め込み」⁴⁾ という概念を用いて、伝統的な制度・慣習・知識から脱して新しい諸関係を形成し、再秩序化していることを示している。また、脱埋め込みメカニズムは「象徴的通標」⁵⁾ の創造と「専門化システム」⁶⁾ の確立の2つに類型化され、その全てが「信頼」(リスクを伴うもの) に依拠している。ギデンズによれば、信頼することは決断の背景となる一般的な心的態度であるとし、人格の発達の中で形成されるものであるという。近代社会において、信頼と安心、リスクと危険は独自の形で結びつき、脱埋め込みメカニズムは広範囲にわたる日常生活での相対的な安心を可能にしている。

3) 再帰性

「人はすべて、行為の不可欠な要素として、日常的に自らが行う事柄の根拠と不断に接触を保ち続けて」(Giddens 1991=訳書 1993: 53) おり、ギデンズはこの過程を「行為の再帰的モニタリング」と呼んでいる。

モダニティ (近代的なるもの) のポスト伝統的秩序の中で自己アイデンティティは再帰的に組織される試みとなり、伝統がその拘束力を失うにつれ、ますます個人に多様な選択肢の中からライフスタイルを選択するように迫っている。「今日の社会生活の『開放性』、行為の文脈の複数化、『権威』の多様性のために、ライフスタイルの選択は自己アイデンティティと日常生活の構成において、ますます重要なものになって」(Giddens 1991=

2005: 6) いき、再帰的に組織された「生活設計」⁷⁾が自己アイデンティティの構造化の中心の特徴となっている。さらに、モダニティ（近代的なものは差異・排除・疎外を生み出し、解放の可能性を提示する一方で近代的制度は自己実現ではなく、自己の抑圧のメカニズムも同時に作り出している。このような「近代という時代条件のもとで、未来が常に開かれているのは、単に物事が日常的に偶然の条件に左右されるだけでなく、社会の現実の営みが1つのまとまりをなす際に関係する、知識の再帰性」(Giddens 1991=訳書 1993: 107)が行われているためである。

ギデンズによれば、自己は「再帰的なプロジェクト」⁸⁾であり、個人の生活の変遷は常に心的な再組織化、伝統的文化においてしばしば通過儀礼という形で儀礼化されたものを要している。またモダニティという環境では変容する自己は個人的変化とを結びつける再帰的な過程の一部として模索され、構築されるという。モダニティにおいて、自己アイデンティティはより伝統的な文脈における自己—社会関係とは対照的な形で問題のあるものとなっている。

(2) 実存的不安などの様々な不安・リスクと「存在論的安心」⁹⁾

1) 実存的不安と存在論的安心—「基本的信頼」に着目して—

日々の行為や言説、毎日の習慣の裏側に喪失感や実存的不安、混沌などが潜んでいる。ギデンズによれば、存在論的安心によって人は転機や危機、ハイリスクの環境を乗り切れるという。ギデンズは存在論的安心の感覚を作り出すもの（安心感の根源）は幼児期初期の経験から見出すことができるとし、エリクソンが述べた「基本的信頼」を安心感の根源の一例として触れている。「基本的信頼」は他者、事物—世界、自己アイデンティティに対する情緒的—認知的方向性のものとなり、根元的な結びつきを形成する。また、ギデンズによれば、基本的信頼を経験することはエルンストン・ブルッホが語る「希望」の中核であり、ティ

リッヒが「生きる勇気」と呼ぶ物の根元であるとし、早期の養育者からの愛情ある世話を通して基本的信頼は発達し、自己アイデンティティを他者の評価と決定的に結びつけることになるという。

さらに、ギデンズは「自分ではない」対象物はそれが常に結びついているルーティンと同時に、対象物や人の安定した世界を新たに経験する際の必要なリンクとして位置付け、基本的信頼は行為や相互行為の環境におけるリスクや危険に対する保護被膜となり情緒的な支えになるという。また、不安は他者の反応と自尊心に関わる世界全体の経験として感じられ、不安の増大は対象—世界を構成する機能としての自意識が曖昧になって自己アイデンティティの意識を脅かしがちであり、存在論的安心の源がなければ、基本的信頼を通じて認知的に組織される人や事物の世界と関連付けて自己を経験できないと論じている。つまり、自己アイデンティティは「人間の再帰的な活動の中で常に作られ、継続されなくてはならないもの」(Giddens 1991=訳書 2005: 57)であり、「生活史」という観点から自分自身によって再帰的に理解されたものである。また、ギデンズはゴッフマンを参考にし、「ある状況で人が気楽でいられるのは、その状況が与える脅威や機会に直面する長い経験を経てのこと」(Giddens 1991=訳書 2005: 62)であると論じている。さらに、行為者は危険を察知し適切な反応をするのに必要な短いインターバルを獲得するが、身体に関する自己管理を絶えず行わなければならないため、能力が崩壊し、存在論的安心の枠組みが脅かされるようなストレスに満ちた時には誰もが傷つきやすいという。

2) 身体と自己の再帰性

ギデンズによれば、自己の再帰性は「心的過程と同時に身体にも広く影響を及ぼし」、「身体はますます、モダニティの内的準拠システムの外側で機能する外部的な『与件』ではなくなり、それ自身再帰的に活用されるものになる」(Giddens 1991=訳書 2005: 8) という。

ギデンズはフーコーが権力のメカニズムとの関わりで身体を分析し、モダニティにおける「規律＝

訓練的権力」の出現について特に集中して論じたことについて触れ、身体に関する見解が不十分であると指摘している。その上で、身体的訓練は文化を超えて能力ある社会的行為者に本質的なものであり、毎日の生活の持続における行為の流れの継続的な特性であり、日常的な身体コントロールは行為主体の性質と他者から能力のある者として受け入れられる（信頼される）という性質の両方にとって不可欠なものであると指摘している。ここでは、身体の定型化されたコントロールは自己アイデンティティの生活史が維持される基本的手段として考えられている。特に、後期近代において身体は自己に関してこれまでよりはるかに従順ではなく、「身体と自己とが自己アイデンティティの再帰的プロジェクトの中で密接に統合されるように」（Giddens 1991＝訳書 2005：247）なり、身体それ自体、個人が追求するアイデンティティにより、直接的に関連するようになる。そして、ギデنزの羞恥を行為主体の動機システムの否定的側面であるとし、その反対にプライド・自尊心、自己アイデンティティの統合性とその価値を確信することを位置づけている。ギデنزによれば、自己のプライド・自尊心を養い、自己の誠実性、他者との関係、より一般的な存在論的安心の感覚との本質的な関係ゆえに、プライドの感覚を維持することは単に自己アイデンティティを防衛し増進する以上の効果があるという。

（３）後期近代特有のリスクと存在論的安心

—親密性の変容—

１）「純粋な関係性」¹⁰⁾

「純粋な関係性は自己の再帰的プロジェクトを形作るための鍵となる背景」（Giddens 1991＝2005：210）である。伝統的な文脈での緊密な個人的なつながりに比べて、独自の再帰性と内的に準拠する秩序を持つ親密な関係は、個人の生活の新しい領域にとって原型的な関係となる「純粋な関係性」といった親密な関係性の変容があり、信頼はもはや定義上、関係それ自身の外部における基準（血縁・社会的責務、伝統的義務などの基準）

に繋ぎ止められることはないという。

２）後期近代特有のリスクや不安

重大な結果をもたらすリスクを意識することは大半の人にとっては漠然とした不安の源になり、ここでも基本的信頼が不安に苛まれるか否かを規定する要素となっている。特に、後期近代においては個人的レベル・集団的レベルの両方で危機はよくあり、継続的かつ深刻な変動なシステムの中においては漠然と「危機」として考えられるような状況が存在する。ギデنزによれば、個人がどれだけ危機を心の奥に押し込めても、その人を悩ませることになり、一般的な不確実性の雰囲気を生み出し、様々な自己アイデンティティの核を脅かすような多様な危機状況に全ての人を不可避免的にさらし出すという。つまり、後期近代の「内的準拠システムの発展によってもたらされる固定的な準拠点の喪失は個人が十分に克服できない道徳的不安を作り出」（Giddens 1991＝2005：210）している事になる。だからこそ、「純粋な関係性は外的な道徳的基準を欠いているがゆえに、運命決定的な時や人生の他の大きな局面においては安心の根拠としては脆弱」（Giddens 1991＝2005：212）である。そのため、「自己アイデンティティは変わりやすい日常生活の経験や断片化する近代的制度などを背景として作られ、多かれ少なかれ再秩序化され」（Giddens 1991＝訳書 2005：210）る必要がある。また、「全ての個人は必ずしも意識してではないが、数多くの媒介された経験を自らの日々の行動に積極的に選択して組み込んでいる」（Giddens 1991＝2005：213）。つまり、「多様な情報に独自の秩序を組み込む」（Giddens 1991＝2005：213）のである。「自己アイデンティティの再帰的な構築は、過去を解釈することと同程度に将来に向けて準備することに関わっている」（Giddens 1991＝2005：94）。

３）ライフスタイルとライフプラン

「ライフスタイルは習慣と方向性の束」（Giddens 1991＝2005：91）であるため、「選択肢を多

かれ少なかれ秩序づけられたパターンとして接合する統一性」を有している。

「代替的なライフスタイルの選択がある世界では、戦略的な生活設計が特に重要」(Giddens 1991=2005: 94) となり、ライフプランは再帰的に組織された自己の軌跡の実質的な内容となり、「生活設計は自己の生活史に登場する将来の活動のコースの準備するための手段」(Giddens 1991=2005: 94) である。また、「ライフスタイルの選択や生活設計は、ただ単に社会的行為主体の日常生活の『なか』に、あるいはそれを構成しつつ存在しているだけでなく、行為主体が行為を形づくる制度的な環境」(Giddens 1991=2005: 95) でもあるため、後期近代において「特定の個人や集団の社会状況がいかに客観的に恵まれないものであろうとも、ライフスタイルの選択や生活設計の影響が多かれ少なかれ、普遍的なものである」(Giddens 1991=2005: 95) という。

そこで、自己アイデンティティを保持するために様々なレベルで解決される必要があるとして、ギデنزの後期近代におけるジレンマとして4点¹¹⁾挙げている。

以上のことから、今日こうしたさまざまな不安やリスクに満ちた社会を生き抜くためには「存在論的安心」の形成と維持が重要となり、さらに個人に「生活設計」といった戦略的にライフスタイルを選択するように迫っていることが分かる。それと同時に、ライフスタイルの選択は経験に基づいて行われるため、常に反省と修正の繰り返しといった「再帰性」が求められ、自己アイデンティティの形成と維持が求められている。これらは、ある種、個人に行為主体としての主体性や行為能力が求められているのではないか。なぜなら、ライフスタイルの選択はさまざまな「経験」を通して導き出されているため、自己と他者の境界が形成されていること、さらに自分自身の経験を自己の軌跡として捉えることができるという前提の上に成り立っているためである。つまり、再帰的に自己をコントロールし、日々を生き抜いていくた

めには少なからずエージェンシーが行使されているため、個人に行為主体としての主体性や能力が求められていると考えられるのではないだろうか。

3. ギデنزの論じた社会学的アディクション（嗜癖）論

ここでは、ギデنزが論じた社会学的アディクション論について、以下の文献を参考にしながら整理していくこととする。

Giddens, A. (1992) *The Transformation of Intimacy: Sexuality, Love and Eroticism*, Polity press. (=松尾精文・松川昭子訳 (1995) 『親密性の変容—近代社会におけるセクシャリティ、愛情、エロティシズム—』、而立書房。)

(1) 共依存の社会学的意義

まず、定義上、嗜癖の基礎にあると言われている「共依存」に関して触れてから「嗜癖」について整理をする。「ひと」へのアディクションが「共依存」という用語で注目をされるようになってから、最初にこの問題を社会学の文脈に引き寄せて論じたのがギデنزである。また、ギデنزとは現代社会における社会関係を記述する際の重要な概念として「共依存」を取り上げている。

ギデنز共依存の背景には近代社会特有の自己の在り方があるとし、共依存者を「生きる上での安心感（存在論的安心）を維持するために、自分が求めているものを明確にしてくれる相手を一人ないし複数必要としている人間」(Giddens 1992=1995: 135、傍点筆者) と定義し、「逆再帰性」の一例であるとした。また、純粋な関係性がただ単に再帰的自己自覚的達成課題や1つに解け合う愛情の範型と緊密に結びつくだけでなく、次第に中心的な役割を占めていくのが見出されるという。ギデنزによれば、嗜癖的つながりは第1に純粋な関係性にとって必要不可欠な自己と他者のモニタリングを許さず、第2に自己アイデンティティを相手の中または固着化した日々の型にはまった行いのなかに没入させ、第3に親密な関

係性の前提条件となる自己開示を妨げ、第4にジェンダー間の不平等な差異や性の習わしを温存していく傾向があるという。さらに、ギデンズは共依存の人間は他の人々の行動や要求を通して自分の自己アイデンティティを見出すことを習慣化し、自己は相手の人間と同化していきやすいとも論じている。近代以降、個人の確立がいまだ十分ではなく、自立した個人と個人の真の親密な関係を結べないでいる。さらに、現代社会は元来アディクティブであり、嗜癖的傾向を内蔵させた社会システムである。また、ギデンズは再帰性が求められているものの、現実の社会では十分に浸透していないと指摘している。さらに、選択の自由はその人が従わなければならない規制や強制を査定していく事を意味し、選択の自由は何かを行うための好機か否かを見極める手段となっていくが、自己の本質に直接影響を脅かす。

そこで、ギデンズはカズルを引用し、共依存者とは「自らの中核をなすアイデンティティが未発達か、それをまだ自覚できていないで、外的存在に対する依存的愛着をもとに築き上げた誤ったアイデンティティを守っている人間」(Giddens 1992=訳書 1995:139)であると述べている。つまり、後期近代においては社会自体が嗜癖的傾向を持ちながら、自らの選択に基づく生活スタイルが称揚され、自己を「再帰的」に形成する事が中心的課題とされつつも、単なる繰り返しがネガティブな意味をもつようになり、不断の自己コントロールが求められるため、そのコントロールに伴う多くの選択や決定を回避し、対象を限定してコントロールしようとする時に共依存が生まれるということになる。また野口(1996)によれば、共依存は「自己のアイデンティティを維持する戦略」と言い換えることができるとし、自己コントロールの課題に直面するという。さらに、清水(2001)によれば、このような現代社会における他者指向性はギデンズに先立つ多くの社会学者によって繰り返し指摘されてきた問題点でもあるようだ。

(2) 嗜癖と近代的自己

ギデンズは自己という再帰的自己自覚的達成課題が重要な意味を持つようになった社会の観点から、嗜癖を理解していく必要があると論じている。

ギデンズは嗜癖を「衝動脅迫的に没頭する様式化された習慣であり、中断した場合手に負えない不安感を生じさせるもの」(Giddens 1992=訳書 1995:110)と定義し、嗜癖は不安感を和らげて心の安らぎをもたらすが、こうした安心感は一時的なものであるという。

また、ギデンズによれば、嗜癖はいずれも防衛反応であり、逃避・自己の遂行能力に不信の影を投げ返るような自立性の欠如の承認であるとし、強い脅迫的行動の場合、自己保全そのものを脅かしていくものでもあり、社会規範は衝動脅迫が強いものになるか否かに大きく影響を与えているという。さらに、嗜癖固有の特徴である「高揚感」や「執着」は「短期間の活動停止状態」であるとし、嗜癖は自己の放棄、自己アイデンティティの擁護に対する再帰的自己自覚的関与を一時的に放棄することでもある。ギデンズによれば、嗜癖は自己という達成課題のなかに、おそらく非常に重大な帰結をもたらすかたちで侵入するが、自己という再帰的自己自覚的達成課題に結び付けて利用されることを拒否する行動形態であるという。

(3) 嗜癖の近代性―「もの」から「ひと」へ―

ここで、ギデンズの前に「もの」へのアディクションのありようを最も高い水準で捉えて嗜癖を説明し、後の嗜癖研究や自助グループ研究に大きな影響を与えた文化人類学者のグレゴリー・ベイトソンについて簡単に整理する。また、野口(1996)はギデンズとベイトソンの二人の嗜癖理論を概観して共通点と相違点を整理しているため、参考にする。二人の共通点は「アディクションとは近代が要請する前提や規範によって必然的に生み出されたものであり、『自己』は近代のフィクションである」という点である。ただし、近代が要請する前提や規範に対する解釈は異なっている。ベイトソンは「客体を操作することによって立ち現れる

主体」というフィクションであると論じる一方で、ギデンズは「再帰性」を挙げている。また、野口(1996)によれば、この1つめの相違点である「自己」というフィクションに関して、ペイトソンは「狂った前提」を廃棄し、「自己」というフィクションを解体する方向性を示唆しているように見える一方で、ギデンズは「再帰的な自己形成」という課題それ自体は不可避の趨勢のなかで選ぶ「自己」のありようを模索しているように見えるという。こうした違いを生み出している理由の1つは回復イメージの違いにある。ペイトソンはAAにおける「ひと」と「ひと」との関係に近代社会とは異なる原理・反転像を見出し、そこでは自己アイデンティティを他者の評価によって支えるという原理そのものが否定されている。しかし、この時代はまだ「ひと」へのアディクションという概念が登場していない時期である。一方で、ギデンズが「ひと」へのアディクションの治療目標としたのは「本当の自分に出会うこと」、「自分らしい自分であり続けること」であり、近代的な自己をより徹底させ、洗練させる方向性をセラピーの中に見出した(野口1996:169-183)。ギデンズ(1992=訳書1995;Giddens1991=2005)によれば、セラピーは単なる不安への対処ではなく、自己が再帰的であることを表明する1つの方法であり、自己実現の軌跡に引き入れられ、内側から生活史を構築・再構築させるものであるという。つまり、ギデンズは嗜癖行動からの回復を自己についての語りの再構成として位置付け、嗜癖行動は個人にとって自己が特殊な形で選択された結果であると考えている。また、野口(1996)によれば、「ひと」へのアディクションの登場は近代性の徹底をはかる1つの巧妙な装置として機能しているという。また、共依存は社会の近代化の結果であると同時に近代化の過程が不完全の表れでもある(加藤1993)。

以上のことを勘案すると、共依存は自己コントロールによって自己を再帰的形成するという近代における自己課題を放棄している一方で、他者と

共依存関係になることであたかも再帰的に自己を形成するための努力をしているようにも見える。また、他者と同化されやすい、他者を通して自己アイデンティティを見出すという点においても、他者と自己における境界が十分に形成されていない事や経験を通じて再帰的に形成される自己アイデンティティも十分に形成されていないという事が読み取れ、嗜癖者との関係から離脱できないということがわかる。では、自己と他者の境界をどのように築いていけばよいのだろうか。ギデンズはセラピーの中で、自分の言葉で語ることによって生活史を再構築し、再帰的に自己を徹底させて回復を目指す方法をとっているが、本来、自己と他者の境界は子どもの頃に築かれたものを基礎としながら、様々な経験を通じて形成されていくものである。また、不安の緩和や自己をコントロールする手段として嗜癖を用いていることから、嗜癖というのがその人にとっての「存在論的安心」になっていると考えられる。また、今の社会においては個人の状態にかかわらず、「存在論的安心」をどのように形成し、維持していくのか、「不安」などが伴うあらゆる局面におけるライフスタイルの選択も含めて、個人に再帰的に自己をコントロールしながら、自己実現していくことが求められている。そのため、あらゆる行動が個人の責任・裁量に委ねられている部分が多いと言える。

4. ギデンズの議論(嗜癖論・後期近代論)の有効性と限界

ここでは今まで整理してきた事に触れつつ、ギデンズの議論の有効性と限界についてまとめていくこととする。

(1) ギデンズの議論の有効性

今、私たちが生きている社会は日々さまざまなリスクや危険、実存的不安をはじめとする様々な不安に満ち、無力感を感じやすい社会である。そのため、どのように存在論的安心(安心感の根源となるもの)を形成し、いかに維持していけるか、そして再帰的に自己をコントロールしながら、ライフスタイルを選択し、自己実現していくことが

求められ、ある種、個人の能力や裁量に委ねられている部分が多い社会である。

本稿で整理してきたように、ギデنز是这样した不安やリスクが多数存在する社会を生き抜くためにも、「存在論的安心」の形成と維持の必要性、その根底にある幼児期に形成される「基本的信頼」の重要性を説いている。存在論的安心の源がなければ、認知的に組織される人や事物の世界と関連付けて自己を経験できず、不安に飲まれずに生き抜いていく事が困難になる。この点に着目して考えると、本来、幼児期に形成される「基本的信頼」や自己と他者の境界が十分に形成されていない場合、自己と他者・事物との距離感が十分に取れなくなるだけでなく、今まで経験してきた事が自分の軌跡として描かれていないため、自己を形成できず（省察と修正の繰り返しといった再帰性が欠けているため、自己を形成できず）、主体性が欠けた状態になり、自分自身の経験に基づくライフスタイルの選択が困難になる。これは行為主体として自己をコントロールすることが難しくなることにも繋がるため、行為主体性・行為能力といったエージェンシーの問題と関係していると考えられる。

さらに、後期近代においては個人の状態にかかわらず、常に個人にライフスタイルの選択と再帰的に自己をコントロールすることが求められているため、存在論的安心が形成されず、主体性や再帰性が欠けて自己アイデンティティの形成も十分にできていない状況下では、不安やリスクに満ちた社会を生き抜く手段として安心感やコントロールを外部の「ひと」や「もの」に求め、嗜癖を選択することに繋がっていると考えられるのではないだろうか。つまり、近代化に伴って親密性が変容し、ライフスタイルの選択や自己コントロールが個人の能力や裁量に委ねられている社会だからこそ、困難な局面に遭遇した時に、自己コントロールするための選択や決断などを自分で行えず、外部の「ひと」や「もの」に委ねるといった嗜癖を選択する事に繋がるのではないだろうか。

（２）ギデنزの議論の限界

今まで整理してきたようにギデنزの後期近代論と嗜癖論が一定の有効性を示しているが、ここではギデنزの議論では網羅していないところを3点整理する。

第1に、ギデنزの後期近代論に対して「議論の手続きが実証的ではない」という批判が多くある。『モダニティと自己アイデンティティ―後期近代における自己と社会―』の訳者の一人である秋吉（2005）によれば、「確かに現実社会のデータを徹底的に調べて仮説を検証する、というスタイルの研究ではない」と論じ、「実証研究に取り組む立場からすると違和感を覚えるのが普通であろう」（秋吉 2005：288）という。しかし、秋吉は「本書の真価は本書そのものからは判断できない」とし、「近年の実証研究が批判的であれ、好意的にであれ、論考のための道具箱として使い始めていることに、1つの真価が表れ」、「考えさせる概念の創出と適用がギデنزの業績」だという。このことから、筆者はギデنزの理論を素材として現実社会で起きている現実の問題を考えていく際には実証的なデータを照らしながら、活用していくことが必要だと考え、今後の課題に繋げることとする。

第2に、ギデنزの後期近代論では「人間」としてひとくくりにしているため、ジェンダーの視点が抜け、嗜癖論においても要因や回復に関する記述においてはジェンダーの視点が抜けている。しかし、松尾（1995）によれば「従来の社会理論が人には女性と男性の間に社会的、文化的、心理的差異が歴然として存在しているという事実にはほとんど留意せず、人びとを、ただ女性とも男性とも判別できない『中性』的存在と見なして論を展開してきた点に対する批判と反省」（松尾 1995：302）があり、ギデنزの研究関心は今日の社会理論が内包しているジレンマとしてのジェンダー問題の解明があるという。さらに、松尾（1995）によれば、『親密性の変容』（1995）で後期近代の状況の下で「今進行中の性革命…女性たちの率先してきた感情革命が、既成の男性中心的社会に、

対人関係はもとより政治的秩序に、いかなる変容をどのような意味でもたらし始めているか」(松尾 1995: 302)を問おうとしているという。ただ、今回着目したギデنزが論じた「嗜癪論」と「後期近代論」においては十分に触れられていなかったため、少なからず、社会の枠組みにおいて嗜癪を論じる際にはジェンダーの視点が抜けてしまう危険性も含んでいると考えられる。

第3に、ギデنزの議論の中ではライフスタイルの選択をする際に伴う選択肢の幅・経験に基づく選択の仕方・機会の差といった部分(階層や階級などにおける視点)には十分に触れていない。というのも、ギデنزは「特定の個人や集団の社会状況がいかに客観的に恵まれないものであらうとも、ライフスタイルの選択や生活設計の影響が多かれ少なかれ、普遍的なものである」(Giddens 1991=訳書 2005: 95)と捉えるにとどめており、あくまでライフスタイルの選択を行う行為主体としての個人・自己に着目して論じていたためである。しかし、後期近代論においても嗜癪論においても、選択肢の幅などの差が自己を再帰的に形成していく際にどのような影響があるのか、なども含めると、階級や階層などにおける選択肢の幅や今までの経験に基づく選択の仕方、機会の差といった部分も見ることが必要なのではないだろうか。また、ほとんどの場合、嗜癪を自己防衛や自己コントロールするための手段として選択していることを踏まえると、限られた選択肢の中から選ばざる負えない状況であったのか、もしくはあらゆる選択肢の中からあえて嗜癪を選択したのか等といった違いも回復過程に何かしら関連しているのではないだろうか。こういった点も踏まえて、今後、エージェンシーやケイパビリティといった視点からも嗜癪という問題を考えていかなければならないのではないだろうか。この点に関しては、筆者の今後の課題として取り組んでいくこととする。

注

1) シェフは日本の嗜癪概念の枠組みに影響を与えた研究者である。1980年代の半ば以降、嗜癪の領域で活発な講演・著作活動を展開しているアメリカのセラピストであり、「リビング・プロセス・ファシリテーション」という機関を運営してメンタルヘルスの専門家指導にあたっている。また、シェフ(1987=訳書 1993: 4)は社会自体が生き延びるために嗜癪を必要としていること、嗜癪以外の選択肢を明らかにするとともに、嗜癪に対する視点を個人や家族レベルから環境や社会システムにまで広げて回復への道筋を模索している。ここでは、3点を取り上げる。

第1に、シェフは私たちが生きている社会全体で嗜癪化が進んでいるとし、この社会を「嗜癪システム」(白人男性システムと反応的女性システムの二元構造)であると論じた。このシステムは非生命的な方向づけであり、混乱したアルコール的思考・不正直で自己中心的で依存的な要素を持っている。さらにこの二元構造とは別に存在しているシステムのことを「リビング・プロセスシステム(生存過程)」と呼び、男性・女性の二元論を超え、民族や性別にこだわらず、全ての人々を非生命的な方向づけとは何かという探究に向かわせるものだと論じている。

第2に、シェフは「嗜癪とは私たちを非力にするプロセスのこと」(Schaefer 1987=訳書 1993: 25)であると定義し、「物質的嗜癪(摂取の嗜癪とも言われ、アルコール、ドラッグ、ニコチンとカフェイン、食物など)」と「プロセス嗜癪(お金をためること・ギャンブル・セックス・仕事・宗教・心配など)」の2つに分類した。嗜癪は気晴らしや痛みの緩和など自己防衛・逃避や自己をコントロールするための手段として用いられているという。

第3に、シェフ(1987=訳書 1993)は諸々のアディクション行動の基礎にある根元的なアディクション・共依存のことを「第一次的嗜癪」と呼び、そこから派生する物質的依存・プロセス嗜癪を「第二次的嗜癪」と呼び、分類した。このように、シェフによって共依存は「結果」から「原因」へと変換し、

対象者がほぼ全ての現代人へ拡張し、共依存があらゆる嗜癖問題の原因へと変化していった。

- 2) ペプコ (1991=1997) は性別による役割分業が社会に浸透していることが女性のアルコール依存症や薬物依存などの嗜癖、強迫行動の主たる要因となっていることが見落とされがちであることに言及しながら、今までのアメリカで行われてきた研究を見直し、女性解放論の観点から批評している。また、性別による役割分業の葛藤と浸透が女性の嗜癖を進行させる重要な要素になっているという新たな解釈を提示することを目的として描いている。ペプコによれば、子ども時代に身につけた自己や人間関係についての信念は大人になっても付きまとい、無力感を感じ続け、自他の境界が不明確である場合に親密になるのは恐ろしいと感じ、境界の内側・自己の芯に恥が存在するようになるという。そして、傷ついた自己は恥を内面化し、自己評価の低下を招き、自己卑下、自傷行為、うつ、自殺思慮、解離性障害などが起きやすいという。自分にはコントロールする力がないと感じている女性は多くの場合、嗜癖に走り、本来外部で生じた問題が引き起こしている痛みや怒りなどを和らげようとしている。さらに、ペプコ (1991=1997: 205-229) は回復として、恥や成熟した自己の欠如からくる不安を覆い隠すために、自己防衛・傷ついた自己を内面化し自己評価の低下現実的な対象法として嗜癖を用いていたのが主に「偽りの自己」であったと認識し、「真の自己」を得るために身体的自己・感情的自己・知的自己を捉えなおす必要性和恥から自尊へと再構築する必要性を説いている。
- 3) ギデンズによれば、後期近代 (ハイ・モダニティ) とは「モダニティの基本的特徴の徹底とグローバル化によって特徴づけられる、近代制度の現在の段階」のことを指している (Giddens 1991=2005: 279)。
- 4) ギデンズによれば、脱埋め込みという概念は「社会関係の相互行為のローカルな脈絡から『引き離し』、時空間の無限の拡がりの中に再構築することを意味している」 (Giddens 1992=訳書 1995: 36) という。

- 5) ギデンズによれば、「象徴的通標」とは「いずれの場合でもそれを手にする個人や集団の特性に関わり無く、『流通』できる、相互交換の媒体」 (Giddens 1992=訳書 1995: 36) のことであるという。例えば、貨幣など。
- 6) ギデンズによれば、「専門化システム」とは「われわれが今日暮らしている物質的、社会的環境の広大な領域を体系づける、科学技術上の成果や職業上の専門化知識の体系のこと」 (Giddens 1992=訳書 1995: 42) であるという。
- 7) ここでいう「生活設計」とは「人生についての計画をもとに個人が組織し、通常はリスクの面から取り組まれるライフスタイルの選択肢の戦略的選択」 (Giddens 1991=2005: 278) のことである。
- 8) 「自己の再帰的プロジェクト」とは、自己の物語の再帰的組織化によって自己アイデンティティが構成される過程のことをいう (Giddens 1991=2005: 278)。
- 9) ギデンズによれば、存在論的安心とは「個人の直接の知覚環境にないものをも含む出来事に対する連続性や秩序の感覚」 (Giddens 1991=2005: 279) のことであり、安心感の根源になるものだという。
- 10) 純粋な関係性とは「内的準拠的な関係、つまり関係そのものが与える満足や見返りに根本的に依拠する関係」のことである (Giddens 1991=2005: 278)。
- 11) ギデンズは後期近代におけるジレンマとして、①統合対断片化 (自己の再帰的プロジェクトは無数の文脈におかれた出来事や媒介された経験を結合し、それを通して特定のコースが描かれなくてはならない) ②無力さ対専有 (ライフスタイルの選択肢は専有の機会を提供する一方で無力感を生み出す)、③権威対不確実性、④個人化された経験対商品化された経験 (自己の物語は個人的専有が消費の標準化する力に影響を受けるような状況の中で個人化されなくてはならない) という4つのジレンマをあげている (Giddens 1991=訳書 2005: 212-236)

参考文献

秋吉美都 (2005) 「解題 新しい思考の道具箱—近代社

- 会の研究プログラムに向けてー」秋吉美都・安藤太郎・筒井淳也『モダニティと自己アイデンティティー後期近代における自己と社会』ハーベスト社。
- Bepko, Claudia. ed. (1991) "Feminism and Addiction", The Haworth Press, (= 斎藤学監訳 (1997) 『フェミニズムとアディクション 共依存セラピーを見直す』日本評論社。)
- Bepko, C. and Krestan J. (1985) The Responsibility Trap: A Blueprint for Treating the Alcoholic Family, The Free Press.
- Giddens, A. (1992) The Transformation of Intimacy: Sexuality, Love and Eroticism, Polity press. (= 松尾精文・松川昭子訳 (1995) 『親密性の変容ー近代社会におけるセクシャリティ、愛情、エロティシズムー』、而立書房。)
- Giddens, A. (1991) Modernity and self-identity, Stanford, Polity press. (= 秋吉美都・安藤太郎・筒井淳也 (2005) 『モダニティと自己アイデンティティー後期近代における自己と社会』ハーベスト社。)
- Giddens, A. (1991) The Consequence of Modernity, Polity press. (= 松尾精文・小幡正敏訳 (1993) 『近代とはいかなる時代か？ーモダニティの帰結ー』而立書房。)
- 加藤篤志 (1993) 「社会学的概念としての『共依存』ー関係論的視点からー」関東社会学機関誌『年報社会学論集』第6号、73-82。
- 松尾精文 (1995) 「訳者あとがき」松尾精文・松川昭子訳『親密性の変容ー近代社会におけるセクシャリティ、愛情、エロティシズムー』、而立書房。
- 野口裕二 (1996) 『アルコールリズムの社会学ーアディクションと近代』、日本評論社。
- 信田さよ子 (1997) 『コントロール・ドラマ』三五館。
- 信田さよ子 (1999) 『アディクションアプローチもうひとつの家族援助論』医学書院
- 信田さよ子 (2000) 『依存症』、文藝春秋。
- 小幡正敏 (1993) 「解説 再帰性と近代」『近代とはいかなる時代か？ーモダニティの帰結ー』而立書房。
- 斎藤学 (1988) 「嗜癖」土居健郎編『異常心理学講座第5巻 神経症と精神病2』みすず書房、73-129。
- 斎藤学 (1990) 「嗜癖者の人格と回復」『精神科治療学』5 (10)、1257-1263。
- 斎藤学 (2003) 「嗜癖とジェンダー」『アディクションと家族』Vol.20 No.1、39-52。
- 斎藤学・波田あい子 (1986) 『女らしさの病ー臨床精神医学と女性論』誠信書房。
- Schaefer, A. W. (1986) Co-Dependence: Misunderstood- Mistreated, Haper San Francisco.
- Schaefer, A. W. (1987) When Society becomes and Addict", Haper & Row (= 斎藤学監訳 (1993) 『嗜癖する社会』誠信書房。)
- 清水新二編 (2001) 『共依存とアディクションー心理・家族・社会』培風館。
- Whitfield, C. L. (1986) Healing the Child Within: Discovery and Recovery for Adult Children of Dysfunctional Families, Health Communications. (= 吉岡隆編 (2000) 『共依存ー自己喪失の病ー』中央法規出版。)

(北海道大学大学院教育学院・修士課程)